

能楽事典から見たシェイクスピア能・狂言

佐々木 隆

プロローグ

「シェイクスピア狂言の初演を巡って」（『むらおさ』第十七号、二〇一三年一月）において最新のシェイクスピア狂言研究を紹介した。そこで気になる点が出て来た。能楽の分野ではこのシェイクスピア能・狂言をどのように取り上げているのかといったことだ。能楽事典関係では「シェイクスピア能」「シェイクスピア狂言」はまだ項目化されていないので、ここでは『新版能・狂言事典』（平凡社、二〇一一）と『能楽大事典』（筑摩書房、二〇一一）の中で「片山博通」「三宅藤九郎」「上田邦義」「英語能」「英語狂言」「新作能」「新作狂言」がどのように取り扱われているのかを取り上げたい。

一 『新版能・狂言事典』

西野春雄・羽田昶編『新版能・狂言事典』は一九七八年に初版が出版され、その後一九九九年に新訂増補され、二〇一二年一月に新版として出版された。本書では特に参考図書目録が充実しているように思える。本書におけるシェイクスピア能・狂言に関する項目等について取り上げてみたい。能曲名として上田邦義の『能ハムレット』『能オセロ』等は取り上げられていない。同時にシェイクスピア狂言を創作した片山博通や三宅藤九郎の項目あるものの、シェイクスピア狂言への言及はない。「英語能」の項目には上田邦義の能シェイクスピア・グループへの言及がある。また、「英語狂言」の項目はあるもののシェイクスピア狂言についての言及はない。「新作能」「新作狂言」の項目あるが、それぞれシェイクスピアに関する言及は全くない。この事典には他にシェイクスピア能・狂言は取り扱われていないのだろうか。

本文ではないが、「参考図書目録」では和泉宗家

『Kyogen :Traditional and Shakespearean of

Izumi School』(一九九三)、高橋康也『まちがいの

狂言』(二〇〇二)、関根勝『狂言とコンメディア・

デラットレー東西文化融合のダイナミズム』(二〇〇

七)、宗方邦義『日英二ヶ国語による「能・オセロー」

創作の研究』(一九九八)、泉紀子作／辰巳満次郎節

付『マクベス(謡本)』(二〇〇五)が取り上げられ

ていることは注目してよいだろう。

二 『能楽大事典』

小林貢・西哲生・羽田昶編『能楽大事典』(筑摩書

房、二〇一二年一月二十日初版)「あとがき」によれ

ば、本書は一九七二年頃から編集の作業が始まった。

発企者は増田正造、執筆者には古川久、片桐登、小

林貢の四人から始まった。四十年の月日を得て今回

出版となった。実数項目は約三八〇〇。

「片山博通」「三宅藤九郎」の項目ではそれぞれの

シェイクスピア狂言については全く紹介されていない。

また、「上田(宗方)邦義」は項目としては取り

上げられていない。また、「英語能」「英語狂言」の

項目はない。しかし、注目すべき点は「新作能」「新

作狂言」の項目があり、ここに記載されている点に

ついてはいくつか注目すべき点がある。『新版能・

狂言事典』(二〇一一)には新しい視点がある。こ

れは初版からのものを基礎にして版を重ねていたも

のよりも、新しいものが加えられ、かえって時間が

かかったために取り上げられたことが推測される。

「新作能」の定義は「明治維新以後に新たに脚本

が書き下ろされた能をさす」(四七六頁)とある。

ここには上田邦義、シェイクスピア能に関する言及

はない。しかし、注目すべきことは「より新しいジ

ヤナルとして英語を母語とする作者によって書かれ、

英語で上演される英語能があり、新作能のヴァリエ

「ジョンといえる」（四七八頁）との指摘は今後の項目化に期待が持てる。

「新作狂言」の定義は「明治維新後に創作あるいは脚色された狂言」（四七五頁）とある。ここでは以下の記述があることに着目しておきたい。

主として「ウインザーの陽気な女房たち」などによりシェイクスピア劇を大胆に翻案した英文学者・高橋康也（法螺侍）（四七五―四七六頁）

片山博通『二人女房』、三宅藤九郎『じゃじゃ馬馴らし』に関する言及は全く見られない。巻末資料にも目を向けてみたい。

「新才能一覧」では「上田邦義『能・ハムレット』二〇〇四年十二月」、「新作狂言」では「片山博通『二人女房』一九五二年六月」、「三宅藤九郎『じゃじゃ馬馴らし』一九七六年四月、一九五二年執筆」、「高

橋康也『法螺侍』一九九一年七月」、「高橋康也『まちがいの狂言』二〇〇一年四月」との記述がある。

三 シェイクスピア狂言

『新版能・狂言事典』（二〇一一）と『能楽大事典』（二〇一一）の中でも「シェイクスピア狂言」という表現を見ることはできなかったが、高橋康也については取扱いは異なるによせ取り上げられている。

新作狂言としてのシェイクスピア狂言について現在の研究では、片山博通『二人女房』、三宅藤九郎『じゃじゃ馬馴らし』、和泉元秀『じゃじゃ馬馴らし』、高橋康也『法螺侍』『まちがいの狂言』が中心である。また原語シェイクスピア狂言ともなれば、ダン・ケニー、荒井良雄、和泉元秀、関根勝のものがあるが、こうしたものを列挙して取り上げているものは今のところほとんどないといってもよいだろう

う。

研究面では滝静寿編『シェイクスピアと狂言』（一九九二）が先駆的な役割を果たしているが残念ながら二つの事典では取り上げられていない。二〇一二年以降は片山博通『二人女房』も研究として取り上げて来たが、原作がシェイクスピア『ウィンザーの陽気な女房たち』であることで、高橋康也『法螺侍』も同様であることや、『二人女房』がこれまで一九五二年に一度しか上演されたことがないこともあり、まだまだ研究は進んでいないのが実状である。

四 シェイクスピア能

シェイクスピア能については『新版能・狂言事典』（平凡社、二〇一一）では比較的取り上げられている傾向にある。能シェイクスピア研究会（能シェイクスピア・グループ）、国際文化融合学会、上田邦義等について詳細には取り上げられていないものの、

宗方邦義『日英二ヶ国語による「能・オセロー」創作の研究』（一九九八）、泉紀子作／辰巳満次郎節付『マクベス（謡本）』（二〇〇五）が取り上げられている。

エピローグ

事典・辞典の項目、見出し語として取り上げられるということは一種「認知」されたことを意味するのではないだろうか。文中において言及されるのは異なり、ある一定の周知、重要性が認められることになるからだ。シェイクスピア狂言が誕生したのが一九五二年、シェイクスピア能を表舞台に押しあげた能シェイクスピア研究会が発足したのが一九八一年。能狂言界がシェイクスピア能、シェイクスピア狂言を認めるには時間がかかるのは予想のつくところである。かつて古川久・小林貢編『狂言辞典 資料編』（一九八五）の「新作狂言一覧」では『二人女

房』については備考欄で「シェイクスピア『ウィンザーの陽気な女房たち』による」、『ぢやぢや馬馴らし』についても備考欄で「シェイクスピアの戯曲による。執筆は昭二七・七」との記載した現在ものもそれを踏襲したものと思われる。新しいものとしては、高橋康也『法螺侍』『まちがいの狂言』は野村万作が演じたことから注目が増した可能性が高い。高橋康也は当時日本シェイクスピア協会会長として、また、一九九一年八月には国際シェイクスピア学会が東京で開催されたという背景もあり、一九九一年前後はシェイクスピア能、シェイクスピア狂言には大きな転機となっている事情もある。能楽事典にはこうした日本におけるシェイクスピア研究の背景は反映されていない。しかし、能狂言界から誕生した片山博通『二人女房』、三宅藤九郎『ぢやぢや馬馴らし』の取扱いが低いのは何故であろうか。

一九五二年と一九九一年の時代背景を踏まえた新

作狂言・新作能に関する研究も今後の課題である。また、新作狂言及び新作能の原作が外国文学である事例が多くなってくるにつれて、今後その取扱いも大きく変わってくるのが予想される。グローバリゼーションの時代では英語狂言・英語能は決して無視できないものとなろう。